

新「共通特論Ⅱ」：臨床腫瘍学各論
個別化医療に向けた肝・胆・膵の悪性腫瘍に対する治療

講義日：2023年10月14日（土）

講師：小島 康志（国立研究開発法人国立国際医療研究センター病院
消化器内科 第四消化器内科医長）

要旨

予後の悪いことで知られてきた肝胆膵領域の悪性腫瘍ですが、少しずつ新たな薬剤が加わり、予後が延長していきます。膵がん・胆道がんでは1年前後の、肝細胞がんではそれ以上の生存期間中央値が第III相試験で得られるようになっていきます。

胆道がんでは、免疫チェックポイント阻害薬デュバルマブの有効性がゲムシタビンとシスプラチンとの併用療法で検証され、同じく免疫チェックポイント阻害薬のペムプロリズマブも同様に期待されます。

肝細胞がんでは、免疫チェックポイント阻害薬のアテゾリズマブと血管新生阻害薬のベバシズマブの併用療法に加え、免疫チェックポイント阻害薬の組み合わせであるがデュバルマブとトレメリマブの併用療法およびデュバルマブが承認を受け、日常臨床で使用できるようになっています。

BRCA 遺伝子変異陽性の治癒切除不能な膵がんにおけるプラチナ系抗がん剤を含む化学療法の維持療法としての PARP 阻害薬のオラパリブや、胆道がんの2次治療で承認を受けた FGFR2 融合遺伝子陽性の人に対するペミガチニブやフチバチニブは、バイオマーカーや遺伝子パネル検査から個別化医療が期待される領域です。

一方で、日常臨床で重要になるのは、一人一人の患者さんとどう向き合って、どういった治療選択をするか、だと思います。現在、治療可能な選択肢から、患者さん一人一人の治療選択の参考になる一助になればと思います。